

令和3年度 川崎市岡本太郎美術館

事業報告・評価書

川崎市岡本太郎美術館

目次

1 展覧会事業

(1) 企画展

- ①「挑む 岡本太郎」展 1
- ②「太郎写真曼陀羅—ホンマタカシが選んだ!! 岡本太郎の眼」 3
- ③「戦後デザイン運動の原点—デザインコミッティーの人々とその軌跡」展
. 5
- ④「第25回岡本太郎現代芸術賞 (TARO 賞)」展 7

(2) 常設展

- ①「岡本太郎と食」展 9
- ②「太郎さんの心の中を楽しもう！」展 10
- ③「ベラボーナ岡本太郎」展 12
- ④「岡本太郎と夜—透明な渾沌」展 14

2 資料収集・整理、調査研究 16

3 作品の保存・修復、貸出 17

4 普及企画 19

5 広報活動 28

6 施設・設備の整備 30

令和3年度事業報告について

1 展覧会事業

(1) 企画展

事業名	①「挑む 岡本太郎」展
会期	令和3年4月24日(土)～7月4日(日)
目標	<p>戦後、旧態依然とした日本の画壇や社会に対峙し、自らの力で新しい芸術の創造に挑んだ岡本太郎。画家として出発した岡本は、絵画という狭い枠組みを超えて壁画や彫刻、家具や日用品に至るまで様々なジャンルに挑戦し数多くの作品を制作するとともに、巨大なモニュメント制作にも挑み、《太陽の塔》を代表作とするパブリックアートを日本各地に設置した。</p> <p>岡本太郎はまた、雑誌や著作、テレビやラジオなど、様々なメディアを通じて幅広い分野にわたり旺盛な言論活動を行ったことでも知られている。岡本の発する力強いメッセージは、美術界にとどまらず、多くの人々に影響を与えた。岡本の強靱な思想は、少年期に岡本一平、かの子という芸術一家のなかで育ち、両親と対等に議論を交わすことで培われ、青年期のパリで時代の先端をゆく芸術家や思想家たちと交流し、ともに活動するなかで身につけたものである。</p> <p>生涯をかけて時代に挑み、ジャンルを超えて多彩な作品を生み出し、メッセージを発信し続けた岡本太郎。本展では、挑み続けた岡本太郎の足跡を、多彩な作品と岡本の言葉とともに紹介した。</p> <p>岡本太郎の作品や言葉の数々は、現在のコロナ禍で閉塞した社会を生きる私たちをも勇気づけ、時代を乗り越えて生きる力を与えてくれるだろう。本展によって、これからの時代を私たちはどのように生きていくべきか考えるきっかけとした。</p>
内容	<p>展示構成</p> <ol style="list-style-type: none">1. プロローグ 少年太郎が挑む2. 青春時代 パリに挑む3. 四番目主義 戦争に挑む4. 戦後 日本の美術界に挑む5. 日本探究 孤独な戦いに挑む6. 大衆のなかへ 社会に挑む7. エピローグ 挑み続ける人生 <p>出品作品</p> <p>岡本太郎 絵画約40点、版画約10点、彫刻約20点、レリーフ8点、写真約20点、 インダストリアルデザイン約30点</p> <p>岡本一平・かの子 作品・資料約30点</p> <p>関連イベント</p> <p>・展覧会会期中にギャラリートーク、ダンスワークショップ「太郎とあなたでダンスする」、 パフォーマンスイベント「生命の挑み」を開催。</p>

内部評価(自己点検)
[実施状況・成果等]
<p>神奈川県は4月20日からまん延防止等重点措置の期間となったが(8月1日まで)、本展は予定通りの会期で開催した。</p> <p>4月下旬にテレビ番組等で美術館や岡本太郎について取り上げられたため、5月までの会期前半の来館者数が例年に比べ非常に多かった。また、「挑む」というキーワードで岡本太郎の作品と生涯を年代順に紹介した本展は、一般の来館者にとってわかりやすく、親しみやすいものであったためか、アンケートでも多くの好評をいただき、入館者数も近年の企画展の中では多く、61日間の会期で21,117人となった。また、会期中の4月下旬から5月下旬の1ヶ月間にわたるツイッターキャンペーン(詳細については広報の項を参照)を行ったこともあり、10代から20代の若い世代の入館者が多くみられた。</p> <p>[関連イベント]</p> <p>4月から5月にかけては来館者が多くなることが見込まれたため、関連イベントは実施せず、6月以降に以下のイベントを行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ギャラリートーク」①6月6日(日)参加者35名②6月20日(日)③参加者153名14:00～15:00 ・「太郎とあなたでダンスする」6月26日(土)14:00～16:00、講師:ホナガヨウコ(ダンスパフォーマー/振付家)、ゲスト:金田幸三(写真家)、対象:小学4年生以上、参加者12名 <p>※イベントの開催時に動画をライブ配信し、イベント終了後は編集した動画を美術館HPで公開した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「生命の挑み」7月4日(日)15:00～16:00、出演:ATSUSHI(舞踊家)、特別ゲスト:坂本雅幸(和太鼓奏者)、参加者:185名
[課題・反省等]
<p>4月5月のピークを過ぎた6月以降についても入館者数が多く、本展の展示室の区割り上、関連イベント実施の際にはソーシャルディスタンスを保つことが非常に難しかった。</p>

[外部評価] 意見(評価できる点や課題など) [A:十分に達成 B:概ね達成 C:達成に至らず]	
<ul style="list-style-type: none"> ・「挑む」という、岡本太郎の基本姿勢に焦点を合わせた展示であったと思う。原色で炎のような形態を追究したり、パフォーマンスをふんだんに採り入れた表現は、まさに現代アートの先駆けであった。本展ではその原点を探りつつ、表現のユニークさを、存分に紹介していく内容であったと思う。 ・コロナ禍での開催であったが、そうした時だからこそ、ということで設定された「挑む」というテーマが時機を捉えていたと思う。しかしながら、ただ展覧会やプログラムを行うだけでは、なかなか来館には繋がらなく、メディア露出やSNS発信、動画制作など、さまざまな形で発信したことが来館者数にも現れたと思う。ホナガヨウコさんのダンスワークショップはとても魅力的で、ぜひ成人や高齢者ともおこなってほしいと思った。 ・「芸術は挑みであり…」という芸術の根源的な精神を真正面から取り上げて、太郎の全身 	A

像を常に紹介して行くことは大切です。こども達を相手にした普及活動にも躊躇なく活用できる素材といってもいい。戦争が挑戦＝芸術を無効にすることも太郎の生き方を通して伝わってくる。	
---	--

事業名	②「太郎写真曼陀羅—ホンマタカシが選んだ!! 岡本太郎の眼」展
会期	令和3年7月17日(土)～10月11日(月)
目標	<p>岡本太郎は雑誌連載の企画で日本各地を取材のために訪問し、文章の挿図のために自ら写真を撮り続けた。そこには1954年の写真家・土門拳との対談で自身が述べた通り「偶然を偶然に捉えて必然」にした像が確かに撮影されている。</p> <p>一方、対象との特有の距離感とクールな色合いを持ち、被写体をその背景や文脈から切り離して写し出すことで高い評価を得てきた写真家・ホンマタカシは、自身の写真について「写真を使った世界の見方をさまざまに問いかける試み」であると語っている。</p> <p>本展は、岡本が撮影した写真集『太郎写真曼陀羅』（筑摩書房、2011年）を編者の一人だったホンマタカシの視点から再構成する写真展である。ホンマは街中の看板や建物、旅先で出会った女性、ふいに写り込んだ人々など、取材の合間に何気なく、ついシャッターを切ってしまったように見える写真に魅力を見出した。また、他者が撮影した像をも取り入れて作品としてきたホンマの視線は、岡本が写した写真と写された写真を区別せず、岡本太郎がそこにいることこそが、岡本太郎の写真であると捉えた。多くの未発表作と岡本自身を合わせた写真群は、岡本の写真の新たな見方を発見する手がかりとなるだろう。</p>
内容	<p>本展では『太郎写真曼陀羅』からホンマタカシが独自の視点で選んだ写真を「岡本太郎自身」「ポートレート」「取材」「看板」「スナップショット」の5つの分類に分け、ホンマタカシから来館者に向けたメッセージと、分類の解説コメントとともに展示した。写真家の視点からみることで、時代や地域を越えた新しい分類での紹介を行った。また、会期中には岡本太郎の写真を使ったワークショップや対談イベントを通して、岡本太郎の写真の新たな魅力や見方を発見する機会とした。</p> <p>出品作品 岡本太郎 写真155点、立体約10点</p> <p>関連イベント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップ「ささいここうちくく」(8/22)、 ・対談「ホンマタカシ×榎木野衣」(9/12)

内部評価(自己点検)
[実施状況・成果等]
<p>8月1日までまん延防止等重点措置、8月2日から緊急事態宣言を受けた緊急事態措置の期間となったが、感染症対策を行い（出入口に消毒液の設置、会場アナウンス、イベント参加者数の制限など）予定通り開催した。来館者にホンマタカシがどのような視点で写真を選び、分類したかを伝えるため、分類ごとに大判のコメントパネルを設置し、ホンマタカシの言葉と岡本太郎の写真を同時に楽しめる構成とした。『太郎写真曼陀羅』が絶版となっているため、図録では本書に掲載されていたホンマタカシのエッセイを再録し、可能な限り写真図版を掲載した。また、ワークショップは小学生を中心に大人の飛び入りもあり17名が参加し、岡本太郎の写真をホンマタカシがカットして、参加者が組み替えて再構成したイメージを制作した。対談イベントは『太郎写真曼陀羅』の写真選定にも携わったホンマタカシと美術批評家・榎木野衣が岡本太郎の写真について語る貴重な機会となった。</p>
[課題・反省等]
<p>緊急事態宣言と神奈川県内の感染者数の急増という背景もあり、夏休み期間中の入場者数は例年と比べスローダウンの傾向となった。SNS等で展示写真の見どころや解説などの発信、フォトスポットの設置を9月以降に行ったが、開幕時に実施した方が宣伝効果が高く見込めた点は反省としたい。</p>

[外部評価] 意見（評価できる点や課題など）[A：十分に達成 B：概ね達成 C：達成に至らず]	
<ul style="list-style-type: none"> ・岡本太郎の写真は個性的だが、ホンマタカシの作品にも、それに負けないほどのクールなユニークさが籠められている。そのため、明らかに撮り損じと思われるような岡本の作品まで、しばしば展覧会では取り上げられていた。この視点がまずもって楽しい。ここに好奇心をくすぐられた観客が、相当数集まったように思われる。 ・写真というメディアを通して、しかし異なるアプローチで世界を捉えた岡本太郎とホンマタカシがコラボレーションする機会を生み出し、新たな岡本太郎を紹介することができたと思う。また岡本太郎の眼で撮影され、ホンマタカシの眼で選ばれた写真は、過ぎし日の日本の姿を伝える記録でもあり、若い世代にとって、近い過去を知る機会にもなる内容だった。モノクロ写真が多かったため、彫刻作品を展示することで、展示にメリハリと動きを出したところも良かった。 ・写真は人によってはもちろん、また同じ人でも時と場合によって異なるのが一目瞭然で分かり、複数の視線が交差する展示が面白かった。複数の視線の存在によって写真の持つ記録性や偶然性、被写体に対する迫り方などを改めて考えさせられた。 ・ホンマタカシの視点を興味深く見た。 	A

事業名	③「戦後デザイン運動の原点—デザインコミッティーの人々とその軌跡」展
会期	令和3年10月23日(土)～令和4年1月16日(日)
目標	<p>岡本太郎は活動の幅が広く、壁画やモニュメント、家具やプロダクトデザインなど多岐にわたるジャンルで活動したが、それを可能にした理由の一つが、本展で紹介した「デザインコミッティー」での活動にある。本展は、戦後黎明期に創立した「デザインコミッティー」の知られざる活動と、そこに集った人々と交流を紹介するものである。</p> <p>戦後まもない1950年代の東京で、「国際デザインコミッティー」(現・日本デザインコミッティー)は、デザイン運動の先駆けとして、国際交流とデザインの啓蒙を目的に設立された。メンバーは、建築家の丹下健三や清家清、デザイナーの柳宗理、剣持勇、亀倉雄策、写真家の石元泰博、画家の岡本太郎、評論家では瀧口修造、浜口隆一など、多彩なジャンルで時代をリードする錚々たる顔ぶれが集った。創立の直接のきっかけだったミラノ・トリエンナーレへの参加は1957年にはたすが、活動の軸となったのは、東京銀座の百貨店・松屋の一角に設けられた「グッドデザイン・コーナー」の商品選定と、関連展覧会の企画である。人々に身近な場で展開されたデザイン運動はひろく一般に人気を集め、メンバーの更新を経ながら、類例のない独自の組織として、現在も活発な活動が続けられている。</p> <p>本展は、デザイン普及の先駆けとなった「デザインコミッティー」の活動と、創立メンバー同士のコラボレーションに焦点を当て、その活動が戦後日本のデザイン、建築や美術をめぐる歴史のなかでどのように影響を与えたかを検証するものである。</p>
内容	<p>展示構成</p> <p>1章 デザインコミッティー創立 —前夜と交流</p> <p>2章 国際交流とデザインの普及 —ミラノ・トリエンナーレとグッドデザイン・コーナー</p> <p>3章 サロンとしてのデザインコミッティー</p> <p>4章 デザインギャラリーの展開</p> <p>出品作品</p> <p>絵画、写真、レリーフ、プロダクトデザイン、家具、建築模型、図面、資料ほか 約250点</p>

内部評価(自己点検)

[実施状況・成果等]

1950年代に創立し、日本のデザイン運動黎明期に大きな役割を果たしつつ、今まで検証されてこなかった「デザインコミッティー」について、岡本太郎との関連を軸に焦点を当てた内容とした。創立メンバーらの交流、ミラノ・トリエンナーレやグッドデザイン・コーナーの活動紹介とともに、柳宗理、渡辺力、森正洋ら時代を象徴するプロダクトや周辺資料等を展示したが、資料中心の展示であるため、会場構成をフジワラテッペイアーキテクツラボに依頼し、構成や視覚的な工夫を試みた。

朝日、毎日、読売など各紙での展評や記事掲載、日曜美術館アートシーンなどメディア紹介の影響とともに、ツイッター広告等の広報も功を奏し、日平均入場者310名、総数20,837名と来館者も多く、図

録も完売するなど、デザイン関係者をはじめ一般の来館者にも好評であった。内容的に、岡本太郎のファン層とは異なるデザインや建築に関心の高い観客層を取り込むこともできたと思われる。

[関連イベント]

- ・対談「これからのデザイントーク」 会場：ガイダンスホール
 - ① 色部義昭／司会：藤原徹平 11月27日(土) 13:30～ 参加者14名
 - ② 柴田文江×小泉誠／司会：藤原徹平 12月11日(土) 13:30～ 参加者28名
- ・「粘土で半立体の絵をこねこね描こう」12月12日(日) 13:30～ 会場：創作アトリエ 14名
- ・学芸員によるギャラリートーク①12月18日(土) 32名、②12月26日(日) 40名、③1月10日(月) 69名 14:00～

[課題・反省等]

本展は、展覧会に関わる関係者や関係機関が非常に多く、事前準備に予想以上の時間と労力を要したが、巡回館である香川県立ミュージアムとの協力体制と多くの関係者の尽力により、まとめることができた。イベント開催については、直前に登壇者からオンライン同時配信の要望が出たが、準備時間がなく断念した経緯があった。オンライン活用については、今後の課題としたい。

[外部評価] 意見(評価できる点や課題など) [A:十分に達成 B:概ね達成 C:達成に至らず]

・「デザインコミッティー」の時代には建築家、デザイナー、写真家、評論家のいずれもが、光り輝いていた。それらの新しきアートの人々を、最盛期の岡本太郎が結集させていく様は、いま思い返しても壮観である。展覧会づくりには困難もあったと聞くが、モノと写真によって歴史を検証していく本格的な展示であった。

・デザインコミッティーを軸に据えることで、岡本太郎ファンに加え、戦後デザインやそこに関わる多様なデザイナーに関心がある新しい層に訴求したことが高く評価できる。2017年の建築をテーマとした展覧会に続く流れで、美術館の魅力をひとひねりして伝える良い流れだと思う。メディア露出やSNS広告、オンライン発信など、多様な層にアクセスする努力も評価できる。

・芸術としてのデザインの黎明期を資料(図録に再録)で確認しながら紹介する貴重な展覧会であった。運動の波は、近代美術館鎌倉別館で開催中の「山口勝弘展」や横浜のBankARTで開催中の「都市デザイン横浜展」にも美術史的に繋がっていることが分かった。「グッドデザイン」ではなく「バッドデザイン」=表現を追求する岡本太郎の立ち位置も伝わり興味深かった。この時代の全体を見渡しながらの展示・図録の編集は大変な量の仕事だったと想像する。

・デザインコミッティーの知られていない活動や繋がりを知ることができた。

A

事業名	④「第25回岡本太郎現代芸術賞」展
会期	令和4年2月19日(土)～5月15日(日)
目標	「岡本太郎現代芸術賞」展は、岡本太郎の精神を継承し、自由な視点と発想で、現代社会に鋭いメッセージを突きつける作家を顕彰するため設立された。今年で25回目をむかえる本賞を通し、21世紀における芸術の新しい可能性を探り、意欲的な作品を紹介する。
内容	<p>本年度は、578組の応募があり、24名(組)の作家が入選。最終審査の結果、岡本太郎賞1名、岡本敏子賞1名、特別賞4名が選出された。</p> <p>岡本太郎賞：吉元れい花《The thread is Eros, It's love!》</p> <p>岡本敏子賞：三塚新司 《Slapstick》</p> <p>特別賞：伊藤千史 《書店レジ前の平台》、硬軟+stenographers 《速記美術のエレメント》、藤森哲 《往日後來図》、村上力 《異形の森》</p> <p>入選：青山夢、井下紗希、因幡都頼、岡田杏里、岡田智貴、角文平、GengoRaw(石橋友也+新倉健人)、平良志季、高田茉依、張安迪、津川奈菜、出店久夫、中澤瑞季、野々上聡人、堀川すなお、森下進士、Yoko-Bon、与那覇俊</p> <p>関連イベント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・来場者による人気投票、来場者から作家への「お手紙プロジェクト」を実施。

内部評価(自己点検)
[実施状況・成果等]
<p>昨年度に引き続き、今年度も郵送とオンラインから応募受付を行った。オンラインは294通、郵送は284通、計578通の応募があった。オンライン応募に関しては、昨年度の反省を踏まえた応募フォームの選定とセッティングを行った結果、職員の作業量の軽減につながった。郵送応募よりも情報管理が容易であり、今後行う意義があると考えます。</p>
[課題・反省等]
<p>今年度もコロナ対策の一環として、設営を2つのチームに分けて行った。安全面のチェック等をこまやかに行えるメリットがある一方で、運営側の負担が大きく、来年度以降に関しては検討の余地がある。</p>

[外部評価] 意見(評価できる点や課題など)[A:十分に達成 B:概ね達成 C:達成に至らず]	
<p>・ここ何回かの展示によって、巨大パネル3面の真ん中にやや異質なオブジェを置いて、造形相互の交流を楽しむという独得のスタイルが定着してきたように思う。それとともにおどろおどろしい雰囲気をごくくに加味させるというのも、太郎賞展では決して外してはならない要素のようなものになってきた。いずれも世間一般の美術展では、決してみられぬ魅力とあっていい。</p> <p>・応募者も大幅に増え、そこから選ばれた入選作品、そして受賞作品からも非常に強い表現力を感じ、四半世紀の歴史を感じる展覧会内容だった。岡本敏子さんが抜かれた</p>	A

<p>こと、最近の社会動向も踏まえ、性別、世代、多様な眼が審査に入ることもあって良いかと思う。来場者が参加できるプログラムはぜひ引き続き、実施してほしい。現存作家の展覧会ということで、作家のトークはぜひオンラインでも配信してほしいと思う。</p> <ul style="list-style-type: none">・現代美術家にとって、まず発表の場があること、さらに岡本太郎賞という冠がついていることは大変な魅力である。継続もまた力である。毎回傾向が変わっているように見えるが、一見派手な見せ方の作品が多く、地味だが素直な視線をしている作品が少ない。太郎賞ということで作家が構えてしまうことにも原因があり、それもまたこの展覧会の特徴かもしれない。・毎年の傾向が見える公募展として興味深く見た。	
--	--

(2) 常設展

事業名	①「岡本太郎と食」展
会期	令和3年4月15日(木)～7月4日(日)
目標	<p>「生きものが生きものを食べるのは、まさに生命の交歓である。」</p> <p>人間の三大欲求の一つである「食」。岡本太郎にとっての「食」は、自身の中の原始的な感動をよびさますものであり、生活と芸術は一体であるという岡本の理念を実現させる糸口の一つでもあった。岡本がデザインしたインダストリアル作品の中にはティーポットやグラスなどの食器、ワインクーラー付きのテーブルなど「食」の場を意識したものが数多く残されている。また、ダイナミックな書が躍る大皿や顔のある茶器などの一風変わった陶芸作品も手掛けた。</p> <p>本展では岡本太郎にまつわる「食」をテーマに、メキシコのホテルの食堂のために依頼された壁画《豊饒の神話》の原画を中心として、油彩、陶器、インダストリアルなどの作品を紹介した。人生、芸術、そして食べることもまた闘いだと考えていた岡本の作品を「食」という視点から読みとく試みである。</p>
内容	<p>出品作品・資料</p> <ul style="list-style-type: none"> ・油彩：《二人》《クリマ》《まひるの顔》《夢の鳥》《サカナ》《挑み》《にらめっこ》《歓喜》《豊饒の神話》《黒の生きもの》 ・彫刻：《若い太陽の塔》《犬の植木鉢》《祭り》《縄文人》《躍動》《喜び》等 ・写真：メキシコの市場、民芸品、死の祭りのパン ・陶器：《まなざし》《聴く》《馬》《潮騒》《青い炎》《笑くぼ》《味》《山川》《顔》等 ・その他：インダストリアル作品、一平・かの子作品、写真パネル、岡本太郎のレシピ等

内部評価(自己点検)

[実施状況・成果等]

コロナ禍により自宅で過ごすことが多くなった現在、関心の高まっている「食」をテーマに、岡本太郎が参加した食のイベントや自身が主催した「実験茶会」、好んだ店や料理のレシピ、食にまつわる作品などについて紹介した。誰でも親しみやすいテーマということと、同時開催の企画展「挑む 岡本太郎」と合わせて見ることで岡本太郎が「食」にも挑んでいたとして、充実感ある感想が多く、好評を得ることができた。また、第三室では展覧会に出る機会の少ない陶器作品のまとまった展示(21点)を行い、岡本太郎の幅広い芸術活動の一端を紹介した。

[課題・反省等]

企画展に岡本太郎作品が多く出品されていたため写真パネルや解説を多く設置した一方で、「食」と作品を結びつける岡本太郎の言葉がもっと知りたいという要望もあった。展示室内でファイリングした記事を見られるようにするなど、今後も工夫して取り組んでいきたい。

[外部評価] 意見 (評価できる点や課題など) [A:十分に達成 B:概ね達成 C:達成に至らず]	
<p>・「食」というと岡本太郎の場合、父親・岡本一平と親しかった北大路魯山人が思い起こされよう。だが「食」への拘りでは、茶会が好きだった太郎も決して魯山人に引けをとるものではない。あらゆる創作を通して、あるいはまたあらゆる機会を生かして、「食」へのチャレンジを繰り返したとみて相違あるまい。</p> <p>・「食」をテーマとしたことで、それにまつわるさまざまなジャンルの岡本太郎の作品を取り上げることができ、子どもから大人までが、それぞれのやり方で生活の中の身近な美について考える機会となった。実験茶会など、岡本太郎ならではの展示内容を見せることができたのも良かったと思う。</p>	A

事業名	②「太郎さんの心の中を楽しもう！」展
会期	令和3年7月8日(木)～10月11日(月)
目標	<p>岡本太郎の作品からは、じつにさまざまな感情があふれだしている。絵画にとどまらず、壁画や彫刻、家具や日用品といったプロダクトデザインに至るまで、まるで太郎の感情そのものが創作の源泉になっているようだ。作品の前に立つと、不思議な表情に笑ってしまったり、びっくりさせられたり、激しい色彩に気持ちを揺さぶられたり、見ているこちら側もいろんな感情を呼び起こされる。</p> <p>本展では、ユーモラスな表情が来館者からも人気の《坐ることを拒否する椅子》を一堂に展示し、また展示の一部は、あえて作品名を付けず、イメージーションを膨らませてみてもらう試みをした。小さな子どものように、にこにこ笑いながら作品とにらめっこをしたり、眉間にしわを寄せながら恐る恐る作品に立ち向かったり……。 「見ることは、創ること」という岡本太郎の言葉どおり、作品を通して岡本太郎の心の中を感じ、見る側の心が動く瞬間も楽しんでいただけるしかけを施し、紹介した。</p>
内容	<p>出品作品</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オリンピック関連の作品、メダルの展示 ・《クリマ》《まひるの顔》などの油彩 ・《にらめっこ》《重工業》などの油彩および、《坐ることを拒否する椅子》《ノン》 ・《傷ましき腕》《マスク》《千手》 ・《マスク》および、《ひもの椅子》《スツール》などの椅子 ・《祭り》《踊り》などの白い彫刻作品 ・鑑賞者が作品と一緒に写真をとるフォトスポットの設置 <p>関連イベント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オリジナルタイトルをつけてみよう <p>展示作品《重工業》《傷ましき腕》のキャプションタイトルを空白とし、オリジナルのタイトルを考え、掲示し、共有するスペースを設置。様々なタイトルが集ま</p>

	<p>り、来館者に楽しまれていた。</p> <p>期間：7月8日（木）～10月11日（月）</p> <p>場所：美術館ギャラリースペース</p> <p>参加者数：《傷ましき腕》：529名 《重工業》：546名</p> <p>・ワークシート配布「見るみるTARO」</p> <p>作品を深く感じて、みるみる太郎さんに近づけるワークシートを配布。</p> <p>配布期間：7月17日（土）～9月10日（金）</p> <p>配布場所：常設展示室入口横</p> <p>配布枚数：1920枚</p> <p>・太郎さんにお手紙を書こう</p> <p>太郎さんや太郎作品への思いのお手紙を書くスペースを設置し特設ポストに投函してもらう。子どもから大人まで、熱い思いをお寄せいただいた手紙は掲示し、心温まる手紙に立ち止まる来館者が多く見受けられた。</p> <p>期間：7月17日（土）～8月22日（日）</p> <p>場所：美術館ギャラリースペース</p> <p>寄せられた手紙の数：210通</p>
--	---

内部評価(自己点検)

[実施状況・成果等]

- ・夏休み期間の展覧会ということもあり、授業の課題で美術館に来た子ども達や、小さいお子さん連れの家族むけに、鑑賞のきっかけになるような問いかけなどを作品から、吹き出しの形で掲示をしたり、作品と一緒に知ってもらいたい太郎の言葉を掲示した。
- ・彫刻の部屋に、観覧者が作品になってポーズをとり写真を撮る「フォトスポット」を設置した。
- ・子どもから大人まで、人気のインダストリアル作品《坐ることを拒否する椅子》を一同に展示した。
- ・イベントとして、子ども向けのワークシートや来場者に作品タイトルを考えてもらう“オリジナルタイトルをつけてみよう”や岡本太郎に手紙を書くブースを設けるなど関連するイベントを行った。子ども向けの内容ではあったが、大人の参加も多く見受けられた。
- ・SNS上で、子ども連れで来館した20～30代の親御さんが、ワークシートや「タイトルを考えるコーナー」「フォトスポット」に関して、「フォトスポット」でポーズをとるお子さんの写真、オリジナルタイトルのコーナーのタイトルが面白かったなどの感想、無理なく鑑賞を促す工夫がされていて良かったという感想が投稿されていた。

[課題・反省等]

- ・「タイトルを考えるコーナー」に対して、寄せられた回答に違和感を覚える方もごく僅かながらいた。岡本太郎の言葉に沿ってやっている旨を作品横のパネルで説明し、ある程度の理解は得られ

てはいたが、集まったタイトルを掲示しているブースにも、再度、実施趣旨と様々な考え方を受け入れる様な岡本太郎の言葉を掲示するなどの工夫が必要だった。

[外部評価] 意見 (評価できる点や課題など) [A : 十分に達成 B : 概ね達成 C : 達成に至らず]	
<p>・本来の目的に縛られない眼で椅子を眺めた「坐ることを拒否する椅子」のシリーズは、岡本太郎の美意識をもっとも端的に表したものといっている。そのやや捻くれた曲者ぶりが、結構楽しい展示でもあったように思う。難しいテーマに面白い視点で挑んだ、意欲的な展示であったのではないか。</p> <p>・太郎作品の中でも実際に座るといふ触覚的鑑賞が可能な「座ることを拒否する椅子」をまとめて展示するという試みは、来場者にとって鑑賞する楽しさを提供する機会となったと思う。また、作品タイトルをつけるという試みにも多くの参加者があり、鑑賞者と作品をつなぐ良いプログラムだった。こうした新しい取り組みに対して、さまざまな価値観をもつ人にも理解してもらいコミュニケーションを引き続き行なっていただきたい。</p>	A

事業名	③「ベラボーナ岡本太郎」展
会期	令和3年10月15日(金)～令和4年1月16日(日)
目標	<p>岡本太郎の代表作の一つとして知られる《太陽の塔》は、1970年に開催された日本万国博覧会(大阪万博)のテーマ館として作られた。大阪万博のテーマ「人類の進歩と調和」の一方で、万博のテーマ館プロデューサーに就任した太郎は、このテーマに疑問を呈し「ベラボーナなものを作る」と宣言する。そしてモダニズムとは正反対の、太古の昔からそこに生えていたような“ベラボーナ”塔を打ち立てた。</p> <p>《太陽の塔》のみならず、太郎の生み出した作品と活動そのものもまさに“ベラボーナ”ものだった。絵画や彫刻のみならず、街中にあるパブリックアート、日常生活で使える日用品や家具、さらには建築に至るまで、ひとつの枠にとどまらない制作活動を行った。</p> <p>本展では、岡本太郎生誕110周年に際し、太郎の“ベラボーナ”作品群を紹介する。</p>
内容	<p>出品作品</p> <ul style="list-style-type: none"> ・画家として出発：油彩作品《空間》《傷ましき腕》《重工業》など ・絵画にとどまらない活動：壁画《明日の神話》建築《マミ会館》インダストリアル《夢の鳥》、その他メダル、ネクタイ、家具などを展示 ・大阪万博から現在まで：《太陽の塔》と関連資料・作品、太郎の没後制作されたグッズ、大阪万博当時の《太陽の塔》をVRで巡る映像の上映 ・パブリックアート：彫刻《若い時計台》《太陽》《こどもの樹》など <p>関連イベント</p> <p>「蘇るVR太陽の塔 ver.4」：大阪万博当時の《太陽の塔》の外観と地下空間、外部《生</p>

	<p>命の樹》をVR空間に再現し、VRゴーグルを装着して巡ることができるイベントを開催。</p> <p>日時：11/13(土), 14(日), 20(土), 21(日) 場所：ガイダンスホール</p> <p>協力：日本工業大学 情報メディア工学科</p>
--	---

内部評価(自己点検)	
[実施状況・成果等]	<ul style="list-style-type: none"> ・同時開催の企画展が「デザインコミッティー」の活動に焦点を当てた展示内容だったため、岡本太郎の作品を観に来た来館者も楽しめるよう常設展では代表作を網羅的に展示した。また企画展との繋がりとして、インダストリアル作品も多く展示した。 ・平成30年度より毎年実施しているイベント「蘇るVR太陽の塔 ver. 4」を本年度も本展の関連イベントとして開催。昨年度は感染拡大防止のためゴーグルを使用したイベントが実施できなかったが、本年度は機器の消毒、参加人数の制限など感染防止対策を徹底の上実施した。 ・グッズや日用品、今でも街中にあるパブリックアート作品を中心に展示したほか、プライベートな太郎のポートレイトを展示することで、より身近に岡本太郎を感じてもらえるよう工夫した。
[課題・反省等]	<p>会期中に2回開催したワンポイントトークでは、コロナ禍にもかかわらず多くの来館者の参加(118人)があった。</p> <p>今後岡本太郎への注目がより集まると常設展のワンポイントトークにも多数の参加が見込まれるため、実施回数を増やしより深く岡本太郎について知ってもらう機会を設けることも検討したい。また参加者が多かったため、参加しない来館者の動線が確保できないという課題があったため、運営側の人員配置などにも今後工夫が必要である。</p>

[外部評価] 意見(評価できる点や課題など) [A:十分に達成 B:概ね達成 C:達成に至らず]	
<ul style="list-style-type: none"> ・まず「ベラボーな」という言葉の由来が話題となった。どうやら江戸の見世物小屋で、人を罵倒するときに使われていた啖呵が、岡本太郎の気性によって取り上げられたらしい。彼の反骨精神を表すのにピッタリだったのだろう。いずれにしても巨大で、前例のない作品をつくり、それを止めないため「ベラボーな」精神が必要だったことは、疑う余地がないだろう。 ・「ベラボー」という言葉が閉塞感のある時期に岡本太郎のエネルギーを与えてくれる明るいイメージをもたらし、異世代をつなぐキーワードとなった。企画展と連動し、代表作を網羅的に鑑賞できる機会を提供した点や、VRイベントの再開がよかった。またワンポイントトークの参加者が非常に多いことに、展覧会への関心の高さと、参加しやすいプログラムデザインだったことが伺える。 ・ベラボーな岡本太郎を改めて知ることができた。 	A

事業名	④「岡本太郎と夜—透明な渾沌」展
会期	令和4年1月20日(木)～5月8日(日)
目標	<p>「夜—透明な渾沌」、この言葉は岡本の著書、『美の呪力』の章タイトルである。「岡本太郎と夜」、この組み合わせは一見意外に思えるかもしれない。《太陽の塔》や、原色を多用した鮮烈な色彩—こうしたイメージからか、ときに「太陽の人」と呼ばれた岡本だが、岡本と夜の関係は思いのほか、深いものであった。「太陽の輝くとき、だが絢爛なる陽をあおいで、ふり向くと、広大な夜がひろがる。」と言うように、岡本が太陽を見つめるとき、その視線は夜にもまた向けられていたのである。代表作のひとつでもある《夜》をはじめとし、1948年に結成した芸術団体「夜の会」も、岡本を語るうえで欠かせない。さらに岡本の描いたさまざまな「夜」にまつわる作品を、著作における言葉を引用しながら展示した。</p> <p>本展では、「夜」というキーワードによって岡本作品を読み解くことで、その新たな一面を来館者にお見せしたい。また、光る作品を一堂に集める等、皆さまに楽しんでいただけるような会場演出にもこだわった。</p>
内容	<p>出品作品</p> <ul style="list-style-type: none"> ・油彩 《夜の会合》《夜》《美女と野獣》《悲しい動物》《愛憎》《まひるの顔》《黒い太陽》 《二つの顔》《まひるの生物》《流れる夢》 ・彫刻 《月の顔》《夢の樹》《太陽》《邂逅》 ・レリーフ 《太陽と月》《若い太陽の顔》《子どもの時間》・「夜の会」に関する資料展示 <p>関連イベント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワンポイントトークを実施

内部評価(自己点検)

[実施状況・成果等]

ひとつ前の常設展とのバランスや、TARO 賞との同時開催であることを考慮し、岡本太郎のあまり知られていない側面に焦点を当てつつも、その画業や活動を時系列で鑑賞できる構成とした。また、岡本作品だけでなく、アブストラクシオン・クレアシオンや、横尾忠則、北代省三の作品も展示し、より立体的に岡本太郎への理解をうながすことを企図した。

[課題・反省等]

まん延防止等重点措置によって、ワンポイントトークが一回分中止となった。今後もこのように対面でのイベントが困難となる可能性があるため、オンラインでも展示趣旨等を周知する手段を検討していきたい。

[外部評価] 意見 (評価できる点や課題など) [A：十分に達成 B：概ね達成 C：達成に至らず]	
<ul style="list-style-type: none"> ・「夜の会」が、文学と美術が一緒になってわが国のアヴァンギャルドを模索する早い試みであったことは、もはや各界の定説となっている。その夜に「透明な混沌」をみた岡本の美意識は、繊細にして猛烈に戦闘的だ。太陽の明るさに隠された夜の混沌こそが、彼の思索を読み解くキーになるのかもしれない。今回の常設展は、それぞれに深い内容を抱えた4つの試みとなった。 ・「夜」という岡本太郎にとって重要な一面をテーマとして取り上げることで、エネルギーな陽のイメージを太郎に持つ人たちに新たな視点を提供できると感じた。代表作の《夜》と、それに対するオマージュの横尾忠則の作品を向かい合わせに展示するという展示の工夫も良かった。TARO展との同時開催ということで、リピーターも多いということも考慮されている。ワンポイントトークは非常に人気も高いので、オンラインでのギャラリートークにもトライしてみても良いかと思う。 ・岡本太郎にとっての「夜」は意外に重要な意味を持っている。弁証法的な思考が身につけている太郎は、単純に昼と夜を時間的な物差しと考えるのではなく、昼と夜を互いに対立させながら一体として考えることによって「夜」こそ生産的になるのだと主張する。岡本の思想の核ともいえる言葉が彼のエッセイで理解できるが、それを展示作品から読み取ることはなかなか難しく、奥の深い常設展であった。 ・横尾、北代作品の展示により、常設に新しい視点がみえた。夜の会、パリ時代の岡本の研究が今後も深まることを期待する。 	A

2 資料収集・整理、調査研究

事業名	資料収集・整理、調査研究
目標	岡本太郎・一平・かの子に関連する資料、ならびに岡本太郎と同時代に交流のあった作家の作品資料を収集する。
内容	岡本太郎と関連作家の資料の収集。 岡本可亭・一平・かの子およびその関連作家の資料を収集する。 岡本太郎没後に制作された関連グッズ等も収集する。

内部評価(自己点検)

[実施状況・成果等]

令和3年度購入資料（令和4年2月時点）

- ・村上善男《津軽・鱈街道五拾壱紅点行列圖》ミクストメディア・キャンバス、73×91cm

[課題・反省等]

岡本太郎と同時代に交流の深かった村上善男作品を、生前の作家とゆかりのあった地元の画廊から購入することができた。村上善男が弘前に移ってからの「釘打ちシリーズ」は、村上の代表的なシリーズであり、東京近郊で所蔵している美術館も多くないため、今後の展示での活用が念頭においた収集ができた。今後とも、岡本一平・かの子・太郎の作品資料および関連作家の作品資料等、少しずつでも購入を継続していきたいと考える。

[外部評価] 意見（評価できる点や課題など）[A：十分に達成 B：概ね達成 C：達成に至らず]

- ・今回購入された村上善男という作家は、「岡本太郎の鬼っ子たち」展に出品され、二科展九室の常連作家でもあった。そうした繋がりから収蔵はきわめて順当といえるが、岡本が村上のどこに惹かれていたかについては、引き続き調査を進めてもらいたい。
- ・岡本太郎と同時代に交流のあった作家の作品収集とその展示を目指す中で、太郎と親交の深かった村上善男の作品が購入できたことを評価したい。
- ・岡本太郎は中央と地方を対等に見ていたため、地方の資料にも眼を配っていただきたい。
- ・資料収集が進み良かった。

A

3 作品の保存・修復、貸出

事業名	作品の保存・修復、貸出
目標	所蔵作品・資料の状態把握に努め、当館での展示に支障が生じないよう貸出の調整を行う。作品・資料の保存・管理業務を定期的に行い、適切な処置を施し、館内の良好な環境の維持に努める。
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・岡本太郎作品を中心に、当館で所蔵する作品・資料の保存及び作品の状態を考慮した作品、資料の貸出を行う。 ・作品調書整備、作品修復業務、燻蒸業務など作品の保存・管理業務を定期的に行い、適切に処置する。 ・環境調査、酸アルカリ調査、温湿度調査、収蔵庫とその周辺の清掃作業など定期的に行い、館内の良好な環境を維持する。

内部評価(自己点検)

[実施状況・成果等]

[作品貸出]

- ・岡本太郎《明日の神話》、岡本太郎撮影写真 17 点を「メキシコ独立 200 周年 メヒコの衝撃 メキシコ体験は日本の根底を揺さぶる」展（会期：令和 3 年 7 月 10 日～9 月 26 日、会場：市原湖畔美術館）に貸出。
- ・岡本太郎《森の掟》を「長野県立美術館グランドオープン記念 森と水と生きる」展（会期：令和 3 年 8 月 28 日～11 月 3 日、会場：長野県立美術館）に貸出。
- ・岡本太郎《縄文人》（画像）、岡本太郎撮影写真 38 点（画像）を「新館オープン 1 周年記念 秋季特別展『岡本太郎が見て、撮った縄文』」（会期：令和 3 年 10 月 2 日～11 月 14 日、会場：十日町市博物館）に貸出。
- ・岡本太郎《二人》、北代省三他作品及び資料 23 点を「山口勝弘展 『日記』（1945-1955）に見る」（会期：令和 4 年 2 月 12 日～4 月 17 日、会場：神奈川県立近代美術館）に貸出。
- ・岡本太郎《マスク》《笑い》《風神》《雷神》、岡本太郎撮影写真パネル 31 点を「まれびとと祝祭—祈りの神秘、芸術の力」展（会期：令和 4 年 3 月 2 日～8 月 21 日、会場：日本橋高島屋史料館 TOKYO）に貸出。
- ・令和 4 年度開催予定の「展覧会 岡本太郎」展開催に向けた出品作品の調整を行う。（令和 4 年 7 月 23 日～10 月 2 日：大阪中之島美術館、10 月 18 日～12 月 28 日：東京都美術館、令和 5 年 1 月 14 日～3 月 14 日：愛知県美術館を巡回予定）

[作品修復]

- ・岡本太郎の油彩作品《面》《プロフィール》《駄々っ子》《遭遇》《眼の立像》《呼ぶ》《踊る人》《風神》計 8 点を修復。
- ・屋外作品の《母の塔》の現状調査及び洗浄を行う。

[課題・反省等]	
<ul style="list-style-type: none"> ・令和4年度の「展覧会 岡本太郎」展では、貸出点数が多く（80点程度）、また主要作品の多くが出品予定のため、当館の常設展と他館との貸出の調整が難しかった。 	

[外部評価] 意見（評価できる点や課題など）[A：十分に達成 B：概ね達成 C：達成に至らず]	
<ul style="list-style-type: none"> ・今年開催が予定されている「展覧会 岡本太郎」への出品準備が、かなりの作業量になりそうである。巡回館ではないものの、惜しみない協賛・協力をお願いしたいところである。 ・作品貸出は、市原湖畔美術館では、貸し出した《明日の神話》が展覧会の基軸となっているなど、他館の展示に重要な貢献をすると同時に、この館の活動を知ってもらう一つのきっかけとなる重要な活動であり、着実に貸し出しを重ねていることが高く評価できる。また、来年度実施予定の大規模な岡本太郎展への作品貸出調整、《母の塔》の調査・洗浄が行えたことも重要な成果である。 ・作品の貸出しが活発になりよかった。 	A

4 普及企画

事業名	普及企画
目標	<ul style="list-style-type: none"> ・学校教育と連携し、学校現場の実情や、要望を踏まえた鑑賞プログラムにより教育普及活動を推進する。 ・近隣の大学、専門学校、幼保・小中高等学校、地域商店街などと連携した事業を行い、地域との交流を深め美術館事業の活性化につなげる。 ・子どもから大人まで幅広く参加でき、美術や岡本太郎芸術に親しめるイベント、ワークショップを開催し、「多くの人に開かれた美術館」というイメージの定着を図るとともに、より地域に根ざした芸術活動の中心的役割をはたす。
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・学校等の団体見学、校外授業のカリキュラムに応じたガイドや鑑賞活動を行う。 ・教育機関で活用する教材の開発や貸出、活用例の紹介、出張授業を行う。 ・教育関係研究会、研修会等における講師の招聘を通じてより多くの教育機関と連携、協働した美術館活動を行う。 ・大学生、高校生をボランティアとして美術館イベントに参加させるとともに、自らが考え、すすんで行動する自主性を重視した活動を行う。 ・幅広い層の来館者に対応した体験型イベントや年齢に応じたワークショップなどを開催し、来館者のニーズに沿っていく。 ・教育普及を目的とした展覧会を開催する。

内部評価(自己点検)

[実施状況・成果等]

《教育プログラム》

団体見学

学校団体や教育機関による鑑賞学習やグループ学習を、対象年齢や学習目的に応じて先生と話し合いながら行うもの。今年度は昨年度同様に、新型コロナウイルス感染症対策を踏まえた鑑賞プログラムを検討し、人数を半数にし、展示室での鑑賞時間を短縮する形で、団体の受入れをしている。緊急事態宣言・蔓延防止宣言が出されると、キャンセルが多くなり学校団体利用も減少した。そのため、年間を通して、利用状況には波があった。鑑賞プログラム（こどもの樹コース・森の掬コース）を基本としているが、スタッフによる対話型鑑賞を屋外作品で行い、展示室内ではワークシートを使用するなど、変更して個人鑑賞を行っている。

＜今年度見学団体＞ (2022.2.1 現在)

幼稚園・保育園	4 団体	230 名
特別支援学校	3 団体	28 名
小・中学校	52 団体	4685 名
高校・大学	12 団体	314 名
その他	21 団体	274 名
中止	23 団体	2343 名

＜R2年度＞(2021.2.1)

幼稚園・保育園	1 団体	30 名
特別支援学校	1 団体	15 名
小・中学校	26 団体	2464 名
高校・大学	6 団体	145 名
その他	7 団体	78 名

職場体験(6校)

中学・高校生に美術館の運営についてその目的や内容を幅広く学んでもらうための活動。学芸員、教育普及、施設管理、看視・受付、ミュージアムショップの仕事等を体験する。今年度は7,8月に高校生がインターンシップ体験を行った。2月に中学校1校の予定があったが、新型コロナウイルス感染症の影響で中止となった。

教材貸出(53校)

岡本太郎紹介ビデオ・DVD、作品をプリントしたカード(A5サイズ・A3)、岡本太郎の「遊ぶ字」をプリントしたカードを貸し出している。下見の際、貸出教材の紹介を必ず行い、それらを活用した事前学習を勧めている。今年度は作品をA5サイズにプリントしたアートカードの貸し出しが多くみられる。市外や県外からの貸し出し希望も増えている。

出張授業(0校)

図工・美術科における鑑賞活動として、また異学年交流によるイベント、ワークショップとして、学校と美術館と一緒に鑑賞プログラムをつくり、実施する。学校行事や授業公開において活用する学校もあるが、今年度は出張授業での職業講話が予定されていたが、新型コロナウイルス感染症の影響もあり中止となった。

教員向け出張授業(1件)

岡本太郎や作品についてと貸出教材を利用した授業のレクチャーを、小学校・中学校の先生方に行い、岡本太郎の啓蒙と、美術館の教材を使用したアート活動を知ってもらう。

今年度は、千葉県流山市の教育研究会造形部会で行った。千葉県には、岡本太郎のパブリックアート作品が設置されているなど、つながりがあるため、今後、当館の教育プログラムを利用してもらいたい。

学校・地域連携事業(3件)

- ・小学校教育研究大会：図画工作科 発表協力 / ビデオ作製

今回は鑑賞をテーマとした発表で、当館の学校団体見学の様子をビデオにまとめ、教材の提供など全面的に協力をした。川崎市内小学校の多くの先生が映像を見てくれたものと期待したい。

- ・小学校図画工作科研究会実技研修会 協力

川崎市小学校図画工作研究会では、昨年度は行われなかった夏季実技研修会が行われた。鑑賞部会では岡本太郎美術館のホームページにある「どこでも TARO アトリエ」に掲載しているいくつかの内容をブースに分かれ行われた。また、アートカードを使用したゲームも行い、実際に先生方が使用することで、アート教材が身近に感じられたのではないかと思えた。美術館が提供している教材の普及活動につながった。

- ・中学校連合文化祭 美術科部会 協力

今年度は高津・宮前地区の13校の生徒65名が参加し、川崎市中学校連合文化祭が開催された。

常設展「生誕 110 年ベラボーナ岡本太郎」、企画展「戦後デザイン運動の原点」を鑑賞した。熱心に作品を鑑賞する姿が見られた。鑑賞後、地区ごとに中学校造形展で展示パネルを制作する。

《普及イベント》

＜TARO 鯉にいどむ！ inラゾーナ川崎プラザ＞

ワークショップ 日程	令和 3 年 4 月 4 日（日）①10:00～11:30 ②12:30～14:00 ③15:00～16:30
作品展示日程	令和 3 年 4 月 24 日（土）～5 月 5 日（水祝）
内 容	恒例となった出張ワークショップ「TARO 鯉に挑む！」を川崎駅に隣接しているラゾーナ川崎プラザのイベント会場で行うもの。太郎鯉や子ども達のつくったカラフルな鯉のぼりに誘われて、親子で楽しく制作する様子が見受けられた。普段、美術館に行く機会が少ない方達にも、岡本太郎美術館に興味をもつきっかけになっていた。
場 所	ラゾーナ川崎プラザ イベントスペース
料 金	無料
参加人数	①18 名 ②18 名 ③18 名（当日申込）

＜TARO 鯉にいどむ！ 2021＞

ワークショップ 日程	令和 3 年①4 月 18 日（日）、②25 日（日） 13 :00～15:30
作品展示日程	令和 3 年 5 月 1 日（土）～5 月 6 日（水振）
内 容	今年で 8 回目になるイベント。毎年実施している恒例イベントで、常設展示や屋外に展示している《TARO 鯉》を鑑賞し、アトリエで思い思いの鯉のぼりを制作し、母の塔広場に展示する。
場 所	創作アトリエ、常設展示室、ギャラリースペース、母の塔前広場
料 金	無料（要観覧料）
参加人数	①10 組（子ども 10 名、大人 10 名）②10 組（子ども 11 名、大人 10 名） （先着順/電話受付）

＜こどもの樹で祝おうこどもの日！＞

日 時	令和 3 年 5 月 2 日（日）13:30～15:30
内 容	《こどもの樹》には、個性豊かな顔が並ぶ。こどもの日を前にして、それぞれの顔をテープで描いてみる。下絵の紙の上に色とりどりのテープを接着し顔を描いていく。出来上がった顔は、アトリエにある木の枝に貼り付けて、楽しむ。最初難しそうだと思っていた子どもたちも、作品に取り組み始めたら要領が分かったようで夢中になってやっていた。展示室で見た《こどもの樹》をスケッチしたもので自作の顔を作成する子もいた。全員の作品が飾られた「こどもの樹」を見て鑑賞会もした。一緒にいらした保護者共々、満足げだった。

場 所	展示室、創作アトリエ
料 金	300 円（要観覧料）
参加人数	10 組（子ども 10 名、大人 9 名）（先着順/電話受付）
＜はいはい&よちよち美術館ツアー①＞	
日 時	令和 3 年①4 月 21 日（水） ②5 月 12 日（水） ③6 月 9 日（水） 10 :30～11 :30
内 容	親子と一緒に鑑賞を楽しむことで、親子のコミュニケーションを図ったり、小さな子でも無理なく美術館の雰囲気味わってもらったりすることができる鑑賞会。
場 所	ガイダンスホール～常設展示室
対 象	3 か月～3 才の幼児とご家族 先着 10 組
料 金	無料（要観覧料）
参加人数	①2 組（子ども 2 名、大人 2 名） ②5 組（子ども 5 名、大人 8 名） ③4 組（子ども 4 名、大人 6 名）（先着順/電話受付）
＜自分に挑む！＞	
日 時	令和 3 年 6 月 19 日（土） 13 : 30～15 : 30
内 容	1980 年、太郎さんは 1 時間制限の中、《挑む》の作品を公開制作した。大きな絵筆を躍動感あふれるタッチでふり、大作を完成させた。私たちも大きな筆で大きな紙に、体いっぱい表現してみよう、ということで作品を制作した。雨天のため、室内での制作だったが、模造紙大の紙に刷毛を使って大きくのびのび描く姿が見られた。鑑賞会も行い、皆満足気だった。完成した作品は、ギャラリーに展示した。
場 所	展示室、創作アトリエ
対 象	小学生以上
料 金	500 円（要観覧料）
参加人数	10 組（子ども 9 名、大人 11 名）（先着順/電話受付）
＜美術館裏探検＞	
日 時	令和 3 年 8 月 8 日（日） ①11:00～11:40 ②13:30～14:10
内 容	普段見ることの出来ないバックヤードの一部を公開する子ども限定のイベント。第一収蔵庫、第二収蔵庫、大型エレベーター・搬入口・キャットウォークなどを探検しながら、美術館がどのように作品を保管し展示しているのかについて話した。普段は入れない場所にキョロキョロ、ワクワクしている子ども達の様子がうかがえた。
場 所	展示室、バックヤード
対 象	小学生以上

料 金	無料
参加人数	①8名 ②9名 (先着順/電話受付)
<p><中学生「夏休みの宿題手伝います」ツアー></p>	
日 時	令和3年①7月27日(火) ②28日(水)③8月19日(木) 10:00~11:00
内 容	今年で4年目となる中学生向けの美術館見学ツアー。中学校では 夏休みの課題として美術館に行って感想をかいたり、新聞をつくったりする学校が多く美術館スタッフによるツアーを行うようになった。今年度は美術館の役割にも触れ、作品だけでなく美術館自体にも興味・関心向けることができるようなワークシートを作成した。友達や家族と一緒に参加し、作品の話をしながら鑑賞していたり、一人で真剣に作品を鑑賞したりする様子が見られた。
場 所	常設展示室、企画展示室
対 象	中学生
料 金	無料
参加人数	①8名 ②9名 ③8名 (当日受付)
<p><キッズ TARO 展連動企画 “よろこび” ってどんな色・形！？探そう！描こう！></p>	
日 時	令和3年9月18日(土) 13:00~15:30
内 容	第11回キッズ TARO 展に展示する作品を美術館で制作する内容。今回のテーマは“よろこび”。美術館スタッフと感情あふれる太郎作品から“よろこび”を探し描きとめながら鑑賞。また、いろいろな画材の使い方をレクチャーし、画材による表現の違いを知ってもらった。これまで使ったことのない画材を積極的に用い、“よろこび”あふれる作品を制作していた。
場 所	常設展示室、創作アトリエ、ギャラリースペース
料 金	300円
対 象	中学生以下
参加人数	7組(子ども8名+大人6名)(先着順/電話受付)
<p><はいはい&よちよち美術館ツアー②></p>	
日 時	令和3年 ④9月8日(水) ⑤10月20日(水) ⑥11月10日(水) ⑦2月9日(水) 10:30~11:30
内 容	親子と一緒に鑑賞を楽しむことで、親子のコミュニケーションを図ったり、小さな子でも無理なく美術館の雰囲気味わってもらったりすることができる鑑賞会。
場 所	ガイダンスホール~常設展示室
対 象	3か月~3才の幼児とご家族 先着5組
料 金	要観覧料

参加人数	④1組（子ども1名、大人2名）⑤3組（子ども3名、大人5名） ⑥4組（子ども4名、大人8名）⑦新型コロナウイルス蔓延防止期間のため中止 (先着順/電話受付)
＜やさしい TARO スケッチ倶楽部＞	
日 時	令和3年10月9日（土）10:00～11:30
内 容	常設展示室で気軽な作品スケッチを行うイベント。最後には描いたものを見ながら、スタッフや参加者同士で“TARO 作品から感じたこと”や“どういう感情になったか”等を楽しく話をした。参加者のほとんどがスケッチ初心者だったが、作品を描いているときには、自信を持って堂々と、集中して取り組んでいた。
場 所	ガイダンスホール、常設展示室
料 金	300円 ＊中学生以下は無料
対 象	中学生以上
参加人数	6名（中学生2名＋大人4名）（先着順/電話受付）
＜第11回キッズ TARO 展—テーマ「よろこび」—＞	
日 時	令和3年11月6日（土）～12月5日（日） 9:30～17:00
内 容	自由な発想で、独創的な作品を作り続けた岡本太郎。その精神を受け継ぎ、子どもの無邪気で自由な表現の場として、第11回目となるキッズ TARO 展を開催しました。今年のテーマは「よろこび」のもと、幅広い作品が集まりました。
場 所	ギャラリースペース
対 象	中学生以下
応募者数	65名
＜TARO 風オリジナル鳥をつくろう＞	
日 時	令和3年11月28日（日）13:30～15:30
内 容	岡本太郎の作品の特徴を活かしながら、コラージュ（紙を切ったり貼ったり）した色紙を使って、ペーパークラフトの鳥を作る。参加者は、付き添いの親御さんと一緒に黙々と取り組み、最後には個性豊かな鳥の作品を生み出していた。
場 所	ガイダンスホール、常設展示室
料 金	300円
対 象	小学生
参加人数	8名（子ども8名＋大人7名）（先着順/電話受付）
＜粘土で半立体（レリーフ）をこねこね描こう！＞	
日 時	令和3年12月12日（日）13:30～15:30
内 容	岡本太郎は、旧東京都庁舎の壁にあった《日の壁》など多くのレリーフを手がけた。レリーフは、壁から絵が飛び出し半立体になっており、絵具で描いた絵画と

は違った存在感をもっている。ワークショップでは、太郎さんのレリーフ作品を鑑賞した後、紙粘土に色を混ぜ合わせ、浮き上がる絵を描いていた。

場 所	展示室、創作アトリエ
料 金	500 円
対 象	小学生～大人
参加人数	8 組（子ども 8 名＋大人 6 名）（先着順/電話受付）

<文化財ポスター展>

日 時	令和 4 年 1 月 29 日（土）～2 月 13 日（日） 9：30～17：00
内 容	神奈川県教育委員会で行われる、文化財保護ポスター展の作品から、川崎市内の中学生による作品を美術館のギャラリースペースに展示した。
場 所	ギャラリースペース
展示点数	26 点

<TARO Birthday Concert>

日 時	令和 4 年 2 月 27 日（日） 14:00～14:45
内 容	岡本太郎は 1911 年 2 月 26 日生まれ。111 歳のバースデーを祝って、コンサートを開催。今年は、オルガン奏者の山口綾規氏による演奏。
場 所	ギャラリースペース
出 演	山口綾規（オルガン奏者）
料 金	無料（椅子席 35 席は要観覧券）
参加人数	椅子席 35 席、立ち見 40 名（先着順/電話受付）

《どこでも TARO アトリエ》

「どこでも TARO アトリエ」は、令和 2 年 4 月に出された緊急事態宣言下で、多くの方が自宅で過ごされている時期に、美術館へ行けなくても、自宅で岡本太郎の作品を楽しんでもらえるように始めたコンテンツである。これまで好評だったワークショップなどから、大人でも子どもでも、気軽に楽しめるアイデアを紹介した。緊急事態宣言解除後も、住まいが遠方の方は来館しにくいと、しばらくの間、「どこでも TARO アトリエ」の公開・更新を続けている。

配信開始：令和 2 年 4 月 19 日（日）～現在継続中

<第 20 弾 テープで描こうこどもの樹>

どこでも TARO アトリエでおなじみの《こどもの樹》を色画用紙のテープを使って作る。一つ作るとう一つ作りたくなる。自分らしく表現する楽しさを味わってみよう。

<第 21 弾 TARO 遊ぶ字>

岡本太郎は、字と絵の表現はもともと同じものだと考えていた。無心に楽しんで字を書いていると自然と絵になってしまうと言っている。そんな遊ぶ字を描く手順を2通り公開した。

<第22弾 岡本太郎と過ごす2022～TAROカレンダーを作ろう～>

当館では、大学との連携で専修大学のインターンシップを受け入れており、毎年、学生たちによるワークショップを行っている。今年度は、太郎さんの写真や作品、名言を散りばめたカレンダーが制作できるオンラインコンテンツを作成、公開した。

<第23弾 TAROさんの手紙『封筒を作ろう!』>

太郎さんはフランス留学中に両親と手紙のやり取りをしていた。そこで、今回は手紙を入れる封筒を作る。大きさを変えるもよし、好きな絵を描くもよし、楽しい封筒を手作りする。第10弾の版画や第13弾の切り絵なども利用して作成。角封筒の型紙を用意し制作方法を公開した。

[課題・反省等]

・今年度も新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、ワークショップの定員は例年の半分以下での開催となった。余裕があれば、参加者を増やす工夫をしても良かった。(例: イベントを午前・午後に分ける等)

・「どこでもTAROアトリエ」については参加者の特定が難しい。定期的にオンライン制作会をするなど、公開中のコンテンツの活用を促す取り組みを始めてみるのも良いかもしれない。

[外部評価] 意見 (評価できる点や課題など) [A:十分に達成 B:概ね達成 C:達成に至らず]

・教員向け出張授業が、千葉県流山市の教育研究会造形部会で開かれている。県も市も違う外部との交流は、現在のようなコロナ禍の閉塞状況ではなおのこと、重要である。その前向きな姿勢を評価したい。

・コロナ禍の中でも対策を講じて、他館と比較しても非常に内容、量ともに充実した活動を実施している点を高く評価する。特に、乳幼児のプログラムや、幼稚園、保育園の受け入れを行い、学校教育で評価され、図工・美術に苦手意識を持つ可能性がある前の時期の子どもたちに、岡本太郎の常識に囚われない創造のエネルギーに接する機会を作っている点は、アートの裾野広げに非常に重要である。収蔵品データベースが充実しているため、GIGA構想とも連携した活動で現場の教員の支援もできると思う。

・コロナ禍で応募者を制限せざるを得ない中でも、こどもや親子、小中学生相手のプログラムは、少人数でも実施する意義がある。それは岡本太郎という人間と作品が教育的効果を期待できる素材としての価値が高いからである。企画展「挑む」関連の普及イベントは芸術そのもの、太郎の精神そのものであり、「芸術入門編」としても分かりやすい。

・コロナで様々な制約があるところオンライン開催も含め熱心に取り組んでいると思う。

A

5 広報活動

事業名	広報活動
目標	<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルス感染症により変動する情勢に対応し、他館の情報収集も行いながら展覧会・開館情報を適正に発信する。緑地内の発信情報を共有し、情報の整合性を維持する。 ・SNS、ホームページ等 WEB 媒体の活用を推進し発信力を高める。
内容	<p>有料広報活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・WEB でのプレスリリース掲載配信(4月3日～、10月15日～) ・ツイッター広告の実施 (4月24日～5月23日)、(12月8日～11日、12月25日～1月9日) ・広報誌「TARO ニュース」刊行 <p>無料広報活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小田急線沿線3駅(下北沢駅・成城学園前駅・新百合ヶ丘駅)相互利用促進のためチラシ配架設置 ・川崎駅東口広告塔デジタルサイネージ掲出(12月26日～1月16日) ・小田急・JR・商店街へのポスター配布、川崎駅展示コーナー、市政だより ・川崎駅アゼリアビジョン展覧会告知動画掲出 ・東急電鉄川崎市内駅構内へのポスター掲示を継続実施 ・武蔵小杉エリアマネージメント デジタルサイネージへのポスター掲出 ・プレスリリースによる新聞・雑誌・WEB への告知(郵送・メール) ・会期中主要マスコミへの掲載依頼、取材受付・対応 ・展覧会ちらし・ポスターを他美術館等へ配布・掲示 ・「太郎写真曼陀羅」展ちらし、書店等、店舗配架設置営業 ・プレス内覧会の実施 ・図録の発送 ・インターネット活用による広報(美術館HP、SNS、外部ページへの登録・配信) ※展覧会情報、イベント情報、美術館ホームページ在宅コンテンツ(どこでも TARO アトリエ) 継続発信 ※第25回 岡本太郎現代芸術賞 作品募集要項・申込受付等、美術館HP ページ作成・掲出 ・テレビ朝日番組、NHK、日本テレビ、TBS 番組収録対応・放送、建築系雑誌対応・掲載

内部評価(自己点検)

[実施状況・成果等]

・新型コロナウイルス感染拡大防止に対応しながらのイベントの開催・来館者への呼びかけ・開館・休館情報をこまめに適切な表現で発信し、緑地の他施設とも対応情報と発信手法を共有・整理し発信した。
 ・昨年度に引き続き、春の展覧会は有料広告でツイッター広告を採用し企画展 PR 動画で配信を行い、初の試みとして、ツイッターフォロワー数を増やす目的としてプレゼントキャンペーンを行い、総数

<p>1,556 件の応募があった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・有料広告での露出拡大を機にツイッターの発信をこまめに行い、4月～5月にかけてテレビ・ラジオ・雑誌に大きく取り上げられたことにより、岡本太郎をリスペクトする著名人の発信もあり、20代～30代などのファンや若い世代の来館者が増えた。 ・秋の紅葉シーズンに、生田緑地の紅葉情報として朝の情報番組のお天気コーナーにて美術館が取り上げられた事から、閑散期に美術館のメディア露出が年末年始にかけて増えた。ツイッター広告によるホームページ誘導と市関連広報スペース・デジタルサイネージを有効的に活用した。 ・年末のNHKの「Twitter#キュレーターバトル」の参加で美術館が紹介され、SNSによる効果が大きかった。
<p>[課題・反省等]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会情勢を考慮しながら、展覧会情報、生田緑地の四季折々の情報、カフェメニューやショップ情報、親しみやすい情報を織り交ぜて、引き続き若い世代に発信力のあるツイッター発信を強化していく。 ・来館者アンケートや世代別統計表、SNSの反応を分析し、次年度に向けて効果的な発信に努める。 ・次年度休館中に向けて発行予定の広報誌制作に力を入れ、早めに取り掛かり最新情報を届ける。

<p>[外部評価] 意見（評価できる点や課題など）[A：十分に達成 B：概ね達成 C：達成に至らず]</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・企画展にからめて、若手人気作家たちが招聘されるケースが増えている。それを目当てにしている若い美術ファンも少なくないと思われるので、広報ではその辺りの紹介に、特に力を入れているように感じられる。 ・これまで行ってきた各種の広報活動に加え、SNSを活用した広告やキャンペーンなどを行ったことで、新しい世代の来館者層を獲得できたことが高く評価できる。コンテンツメイクをする学芸、教育普及チームと連携し、さらにユニークな広報活動を展開してほしい。また、アンケートもきちんと行っているが、回収率をあげることで、外部評価の一つとして館の活動をバックアップする機能を持たせることができると思う。 ・美術館の常連の鑑賞者、固定客の存在も見逃せないと思う。 ・メディアの取り上げ事例も多く良かったと思う。 	<p>A</p>

6 施設・設備の整備

事業名	施設・設備の整備
目標	開館から 22 年を経過し、建物・設備が老朽化しており、施設の長寿命化及び作品の保全、市民の施設利用の利便性の向上、安全・安心の確保を図るため施設の計画的な更新・補修を行う。
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 空気熱源ヒートポンプ設備整備 ・ 空調自動制御装置整備 ・ 温水一次ポンプ整備 ・ 壁面、植栽壁整備 ・ シャッター補修工事 ・ 電気湯沸器補修工事 ・ 池循環ポンプ等補修工事 ・ 母の塔前広場等防水設備長寿命化整備工事計画の策定

内部評価(自己点検)

[実施状況・成果等]

今年度は長年の懸案であった、空調自動制御装置の更新を行い、館内の空調管理の安定化を図った。また機器の故障などにより発生した多くの緊急工事や整備に対応し、館の環境改善を行った。同時に次年度に着工となる母の塔前広場防水設備工事について、設計対応及び約半年の休館を伴う工事の実施計画の策定を行った。

[課題・反省等]

計画修繕とは別に突発的な工事が増加しており、なるべく早期に修繕箇所を発見し対応することが必要となると同時に、予算の確保が継続的な課題となっている。

[外部評価] 意見（評価できる点や課題など） [A：十分に達成 B：概ね達成 C：達成に至らず]

- ・ 母の塔前広場の防水設備工事は、規模といい、雨漏り対策としての緊急性といい、美術館としてはきわめて重要な工事と思われる。山地という特殊条件も勘案しながら、万全の取り組みを期待したい。
- ・ 館の活動を根本的に支える施設・設備の整備は、非常に重要な要件であるが、長年の懸案材料だった空調管理の安定化と、来年度に着工される「母の塔前広場」の工事の計画策定ができ、目標を達成できたことが評価できる。
- ・ 長中期と短期の計画をうまく組み合わせ、先取りをしながら改修・修繕工事を進めてもらいたい。特に水はけ、湿気対策。
- ・ 設備など改修が進むべき事例が多いと思う。

A